

公務員の定年が延長になる。それも段階的にである。最終的には65歳が定年となる。幸か不幸か、自分が定年延長の最初の該当者となる。定年が1年延びて61歳となる。1年くらい大したことないだろうと思われがちだが、「役職定年制」が絡むため、ややこしくなる。

役職定年とは、定年の前に、ある年齢に達したことなどを理由に部長や課長などといった役職から外れる制度のことである。教員であれば、校長や副校長、教頭は60歳で終わり、その後は教諭になるということである。

この制度を理解した当初は、この前まで校長だった人間が職員室の席に座っているのは迷惑だろうし、子どもにとってもよくないのではないかと考えた。定年が61歳になったとしても、60歳で退職しようと考えていた。

だが、徐々に考えが変わってきた。仕事をさせていただいている以上、定年まで職務を全うすることが社会人としての務めなのではないか。それも公務員である。制度を守るべき立場にあるのではないか。

そうであればと前向きに考えるようになった。今まで立場上、偉そうに言ってきたことを、果たして自分ができるかどうかやってみようと思えるようになった。一番は国語の授業である。今までたくさんの授業を見てきた。先生方へのアドバイスもしてきた。自分が言ってきたことを自分でやってみるのである。イメージどおりにできるかどうかはわからない。それでも、ちょっと楽しみでもある。

せっかく国語の授業ができるのであれば、毎時間の授業記録を残していこうと思う。今頃になって、もっと記録を残しておけばと後悔することが多い。記録は重要である。記録は使える。記録には力がある。現在続けている校長室だよりは出せなくなる。その代わりとなる存在でもある。

部活動は、現在、大きな変革期にある。あと数年は、学校での部活動は継続されるであろう。昔の数々の失敗を糧に、今度はうまくできそうな気がする。ただし、強くする、結果を出すとなると、また違った話になってくる。

17年も教諭をやっていない。感覚が戻るかよりも、あのハードなリズムに乗っていけるかが不安である。1年限定である。歯を食いしばってでもやるしかない。校長のまま1年、定年が延びるのであれば話は早い。だが、現実には厳しいものである。ずっと教員をやってきて、今までは選択肢がなかった。複数の道があり、自分でどの道を進むのか決めることができる機会はなかった。だが、今回は自分で選ぶことができる。そうであれば、あえて苦しい道を選ぶ。そうしたほうがよいと先人たちは教えている。楽なほうを選ばないということである。

制度が決まった以上は、文句を言っても始まらない。いかに新しい制度に自分を合わせて、自分の人生を充実させていくかである。61歳定年後は、可能な範囲で自分がやりたいことをやっていきたい。少しでも社会貢献をしていきたい。

この「校長室だより～燦燦～」も明日から4年目に入る。これは校長でないとは出ることができない。期間限定である。今までは校長で終わることを考えていた。これからは、教諭に戻ることを想定して校長職を務めていきたい。そうすれば、見方や考え方も少し変わってくるように思う。そのほうが、校長としての仕事にもプラスに働くのではなかろうか。